



(號九十七百二第)

- |                        |           |
|------------------------|-----------|
| 日蓮主義の信仰と活動             | 大僧正 本多日生  |
| 日蓮聖人教義綱要(第九回)          | 僧正 井村日成   |
| 宗教々育を國家最高學府内に特設すべき必要あり | 文部大臣 岡田良平 |
| 〇機微譚語(五五)不針金錢(五六)海鼠の俳句 | 山根青村      |
| 釋尊一代の概要                | 松尾鼓城      |
| 課題和歌「家」                | 子爵 清岡長言選  |
| 統一俳句、自慶會、各地雜報          | ……多數      |

所編輯一統町前山白川石小京東 所取扱務事行發  
 ▶番三三五三三京東座口替振◀

# 出第七卷

世界的 經典の 根本的 闡明

# 大藏經要義

文學博士 井上哲次郎先生叙  
 中將 佐藤鐵太郎先生序

文學博士 姉崎正治先生(附)論文  
 大僧正 本多日生師撰述

(全拾八卷)

隔月一册 づ、刊行

入函金方三裝洋判菊  
 頁百四約卷每  
 錢拾八圓壹各價正  
 錢二十各料送地内

所行發

町本區橋本市京東

館文博

番〇四二京東座口金貯替振

■第一卷より第七卷迄刊行  
 本書は大藏經中重要なる經典約一千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し、且つ要文を翻譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義深遠なる哲學的の眞理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也大藏經は佛教各宗の源流にして復是れ東洋文明の最高權威たるは論なき所今や新文明の創建に進むに當り歴史的思想の傳統を諦觀するの必要迫れるの時の大著に接す心ある國人は舉つて本書の出現を歡迎すべき也。

- |        |              |        |
|--------|--------------|--------|
| 本多 三版  | 法華經講義(全二冊)   | 各壹圓八拾錢 |
| 大僧正 四版 | 日蓮主義(全一冊)    | 九拾五錢   |
| 正生 再版  | 修養と日蓮主義(全一冊) | 九拾五錢   |
| 著師     |              | 郵稅六錢   |

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

明治三十三年二月二十四日第三種郵便物認可  
 大正七年四月十五日發行(毎月一回十五日發行)  
 統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所



○みたから第二號目錄

- 平民食堂の設備
- 活動寫眞善感化の活用
- 自愛自重すべき労働者
- 平凡と真理
- 社會の互惠
- 労働者とその思想の調節
- 三大特色の擁護
- 天力人力國力
- 内外新聞
- 奇談實説生の母二人
- フロック姿の車屋
- 櫻と日本人
- はちす會俳句
- 後藤外相の孝行
- 日本人は泥棒にも尙此心あり
- 獨逸人の長所
- 思想界の振起と報酬觀念の改善
- 自慶會其他雜報

松尾 鼓城  
本多 日生  
くろがね 生  
佐藤 中將  
岩野 大監  
關田 日城

唐 紹 儀

振替口座東京四一、一〇三

みたから社會計部

代金は必ず右へ御拂込を乞ふ、統一の三三五三三と御間違ひ無之様願上置候

廣 告

小納儀先年來小笠原島に千葉縣下法蓮寺を移轉出願中の處昨年十二月七日付にて其筋の許可を得候間御承知被成下度候實は移轉配意に預りし先輩諸師には一々御禮且つ御通知可申上筈に候得共航海不便等の爲乍略儀誌上を以て御通知申上候間不惡御了承願上候 敬具

大正七年四月二十八日

小笠原島父島大村西町

法蓮寺

吉塚通榮

宗内諸君

○教學財團基本金及び申込受領報告

- 金貳拾五圓也 品川妙蓮寺且黒田惣三郎
  - 金貳圓也 第一教區長照寺窪田純榮
  - 金參圓也 松崎木立寺且立木ツル女
  - 金貳圓也 同寺且 杉村五百造
  - 金五圓也 第一教區淨林寺且綱川幸一郎
  - 金七拾貳圓也 第十七教區新興寺出海俊義
  - 金參拾圓七拾錢也 鈴木正二
- 以上大正七年三月三十一日迄到着分

改名廣告

從來「會俊」のところ、自今左に改名致候。

千葉縣東金西福寺

山岡日紹

改「泰行」自今左の如く稱す

千葉縣山武郡大和村田中法光寺

成島日衛

一金貳圓也 涌井氏

一金壹圓也 大川圓精氏

右「みたから」發行を祝して寄贈相成難有領收仕候。

日蓮主義の信仰と活動 (速記)

△國民教育の方法

政治家が國民を導く上に於ても人間は悪い方から説いて行かんならぬと云ふこととは駄目である、勇將の下に弱卒無しと云ふが如き意味で導いて行かねばならぬ然るにどの子も一兄貴も弟も頭を一つや二つはつたんでは肯かぬ、其の次の妹もしぶとい奴で、柱に縛つてドヤサなければならぬと言ふやうでは困る(笑)。所が其の教育の方法が善いと云ふと、「お前はそんなことをしてはいけませんね」と優しく言つて、教訓を以て感化して行くとか出来る。其處が大事な點である。感化しを以て行かねばならぬやうなのは、教育の方法が悪いのであります。

△東西兩洋の思想の弊害

それから佛様はどうかと云ふと、是は先にも井村僧正が一言して居りました本

日蓮主義の信仰と活動

本 多 日 生

佛と申して、佛様の澤山在る中の根本の佛様を教へて居るのであります。此の事も非常に大事な所である、此事は現在の日本人の思想がチヨツと低いから一般に解釋しにくい所であるが、其處を味つて見ると餘程面白い、是は低い所の西洋の基督教に於ては、ゴット一人が偉いと言つて居る、所謂一神教と言つて立て居るのであるが、東洋の方の一般の思想と云ふものは汎神主義と言つて、神様は幾らもある、佛様も幾らもある、のみならず此の世に命ある者は皆神になる佛になると云ふことを以て立て居るのである。凡てが神であり佛であると云ふ思想は今申す通り一切衆生は悉く佛性がある、是が即ち東洋の思想である。此の一切の人が神佛と成り得ると云ふこと、神様は一つと云ふことが、西洋と東洋との違ひである。併しそれだけでは本當のものではないのである、神は一つと云ふこと

△東洋思想の特色

日本の思想が低い、世界の思想が低くて此の事が未だ分らない。一つの中心で一切が働くと云ふことが分らなければな

は、それが爲に外の尊い志を皆な斥けてしまふやうな狭い考へになつて、譬へば日本に来て日本の天照太神を戴くことも出来ないし、佛敎の佛様を有難いと思ふことも出来ないやうな狭隘なるものであります。又佛敎や東洋の思想と云ふものは汎神主義でありますから、澤山の神澤山の佛を認め、又凡ての人が神にも成るし佛にも成ると云ふ是は結構であります、けれども中心と云ふものを立てなくてはいけません。耶蘇敎には狭い弊害がある、東洋の思想には汎神主義なるが故に纏りの附かない弊害がある。此の二つの狭い了簡の弊害と、纏りの付かない弊害とを除いた非常に廣い思想を以て、チャンと中心の立つ敎へと云ふものが法華經に依つて示された本佛思想であります。此の價値を味ふだけの人が此の中に居るかどうか。



らぬ。例へば人間にしても心は一つである、併し其の心の心が手を以て字を書く、口を以て辯論をやる、足を以て歩行く。其の手でする仕事も字を書くばかりぢやない、何でもする様に、人間の働きと云ふものはあるけれども一つの心に依つて是が纏められて居ります。又日本人は個人々々の仕事は色々ありますけれども、併し國家を中心にして現はれた國民理想と云ふものは統一されて居るのであります(拍手)。日本人は各々職業を異にするけれども、國家の大目的——國家の大理想に際會すると云ふ時分には統一する、纏らねばならぬ時には一つになる。例へば軍隊で見ますれば二萬人も三萬人もと云ふ澤山の兵隊が、工兵なら工兵の仕事、歩兵なら歩兵の仕事をする、或は何科は何をするかと云ふ風にそれ／＼働くが、さて纏る時には一號令の下にバツと止まる。それが即ち完全なる軍隊である、餘々自分勝手な事をやるんぢや仕方がない、軍隊としての價値がないことになるが、物の進歩した思想と云ふものは、澤山に分れて働けけれども、それを

統一する所に尊い所があるのてあります(拍手)。耶蘇教の神様のやうに一人しか無いと云ふことは東洋の思想では取らぬことであるし、眞理に適はぬことである。

### △本佛釋迦尊を了解せよ

て東洋の汎神主義は宜いが、どうも纏りの中心を研究しないのが東洋の思想の缺點であるが、法華經は卓越して居る、法華經に於ては一切衆生佛に成り得るのみならず、其の中心を統一する筆法に出来て居る。今茲に佛敎を信する上に於ては、我が釋迦牟尼佛を以て之を中心とする、どれ程古い前から考へても御釋迦様は本佛である。法華經には三世十方周遍利益と云ふことが説かれてある。さうしてそれが働く場合に於てはあらゆる佛ともなり菩薩ともなると云ふので、即ち其の思想は中心が一つであること天の一月萬水に影を宿すが如きものであると云ふ所まで行かなければ、宗教の本尊となるべき絶対的人格者と云ふものは説明し盡したものでないのてである。耶蘇教の思想はいけな、東洋の敎へは眞理で

### △民主主義の多數と

#### 基督教の一部

ある。併し其の中心を與へないと云ふことは即ち完きものでない、夫故に法華經は其の中に中心を與へたことに於て、此の本佛の思想を光顯しなければ、眞の魂を失つて仕舞ふと云ふことを御説きになつたのである、之を了解せんければならぬ。

日本は天子様に統一される所の國であつて、億兆みな其の徳を仰いで働くのである。近頃のやうに民主思想であるとか、民本主義とか云ふことは皆な詰らぬことである。汎神主義としては一切衆生が佛であるけれども、十界五具と云ふことを説明して、一切みな佛であるけれども其處に本佛を中心として居る。又耶蘇敎は元來矛盾極まるもので、誰一人神に成り得ない思想、造物主の外に神はないと云ふ耶蘇敎徒が、民主主義などと言ふのは全然其の宗教の思想と違つて居るのであります。此の世の中に一人しか神はないと云ふ耶蘇敎は、由來絶対服従主義

である、專制主義も亦極まれるものである。世界を造つて貰つたのも神の力である、人を造つたのも神の力である、さうして誰も神には成り得ない所のものてあつて、神は一人である、實に獨裁專制の神である、さうして思想の方に於て民主主義を説き個人主義を説くのだから、西洋の文明思想は矛盾した所のものてある。それを真似て日本人がさも新しいやうに民主主義とか個人主義などを説くと云ふことは、思慮分別の足らない所の實に淺薄極まる輕佻浮薄なる思想であります。吾々東洋人が過去の文明を味ひ得たならば、さう云ふ偏つたものを教へ導ひてやる迄であつて、向ふの風潮に従つて場合に依つて民主主義を説くと云ふやうなことは、大なる間違である。

### △孰れが新らしきか

今日の新聞にも見えましたが、青年急進團などが寄つて、民主主義とか何とか言つて、巡査に叱言を言はれてバタ／＼して居る、あんな事は實に害がある。又中學の青年が女優の尻を追ひ廻つて、親

から色々なことを言つて錢を誤魔化し、それ／＼で以て何か職とか幕とか云ふものを買つてさうして女優に贈るなども、各々形は異なるけれども同じ突飛なことであつて、そんなのは駄目である。大に自重して眞に此の東洋文明の價値と云ふものを發揮しなければならぬ。今頃になつて西洋の流れ行く思想の末を逐ふと云ふことは、餘程遅れた鈍間な者である。此の頃新らしいと云ふのは東洋の中心文明の絶対の權威を主張するものが、眞に新らしい所の生き生きとした思想であつて、此處が大事のことてあります(拍手)。

### △本佛と諸神、天月水月

であるから中心の一つの本佛より一切のものを纏めて行く所の思想、是が進んでは日蓮主義の本尊の上に現はれて参りました。日蓮聖人が此の大本尊を御顯はしになつて、凡てのものを集めて茲に中心の一つの本佛を顯はして居る。此の本佛と一切の我國の神や佛との關係と云ふものは、所謂天月と水月の如き關係と見て居るのである。是は晝量品に詳しく説

### △本尊の本體、基督の偶像排斥を退く

左様な譯で宗教の本尊と云ふことが、第一日蓮主義に於ては非常に進んで居る、是は詰り前から本尊を研究になつて支那印度の事から研究してあるのてあります、併し傳敎大師のやうな偉らい人も木尊のことは明瞭して居らない。て日蓮は今法華經に基つて眞に尊い本尊を



顯はすと云ふので此の御本尊にも書いて  
在る通り、二千二百二十餘年の歲月を  
居るけれども、一閻浮提と云ふ全世界  
に於て未だ曾て斯の如き大本尊を顯はし  
た者はない、「日蓮如何なる不思議にてや  
候はん、偉大なる本尊を顯す」と云はれ  
て、非帝に有難いことだと言つて此の本  
尊を顯はした。文字や木像にも造つて居  
るけれども、活ける本體と云ふものは本  
佛であるから、何處にも御在てなざるの  
てある。「近しと雖も而も見えざらしむ  
て見えぬが何處にも御在てになる、其  
處を能く味はなければいけない。文字や  
木像ばかりに捉はれて居つては是は低劣  
な宗教になる、併ながら耶蘇教のやうに  
文字や木像の本尊を攻撃するのと同違つ  
て居る。例へば親の寫眞を貰つて、其の  
寫眞を見ては親を忘れると云ふことは餘  
程の馬鹿でなくては無い、寫眞が在れば  
其の寫眞を見て親を想ひ起す、併し寫眞  
が在つては邪魔になる、寫眞があるから  
父さんや母さんやを忘れると云ふのは、是は餘程  
變テコナ人間である。美人なら美人の寫  
眞を貰つて此の寫眞を見ては本物の美人

を忘れるから焼いてしまふ、そんなこと  
はない(大笑)。又寫眞を貰つて其の寫眞が  
餘り美しいから寫眞に見惚れてしまつ  
て、活ける美人を忘れると云ふこともな  
からう、基督教が偶像を排するのは丁度  
寫眞があつては邪魔だと言つて居るやう

# 日蓮聖人教義綱要 (第九回)

井村日・咸

## 第二章 佛陀論

### 第六節 三德有緣

凡そ宇宙間の事象は一として因果の法  
別に支配せられざるものはないのであつ  
て、本無今有、已有還無の理あること  
なしとは哲理の原則として定められた處  
である、宇宙萬有の原則にして然る以上  
は佛陀の出現に就いても當然因果關係の  
存在を否むと云ふことは出来ないものであ  
る、元來因果論の主張は釋尊出世已前の  
婆羅門教徒の中に發達したものである

が、彼等の所論は甚だ單純なるものであ  
つて、一因に對して必ず一果あり、吾人  
今生の報果は過去の作因に依るを以つて  
善惡共に宿因に任せて營むの外なければ  
今生の努力を要せずと説いて、所謂果報  
は寝て待て牡丹餅は棚から落ちると云ふ  
主義を立て居つたのである(宿作因外  
道、或は因果論師と稱せらるゝもの、主  
張)然るに釋尊出世し給ふて彼等の主張  
を駁撃せられて、縱令原因は存在するに  
せよ、其因種をして果實を生ぜしむるに  
は相當の手段を要する、例せば穀物の種

子の如き、其果實を結ぶの能力は存在す  
るも、之を播種して熱氣と濕氣とを適當  
に供給せずんば、遂に發芽するとなく、  
永久に果實を生ずること能はざるが如き  
であつて、如何に宿因の存在するあるも  
之を現實せしむるには、緣由なかるべか  
らず、此緣由は現在世の努力に依るべき  
ものであることを教へられたのが、佛陀  
の因果論である、故に佛陀の因果論は具  
さに言へば因果論である、因と果との  
間に緣を入れて、其關係を説いたのが、  
佛陀の所説の價值ある所である、故に法  
華經は「佛種は緣より起る」と説になつ  
て緣の大事であることを説きになつて  
居ります、萬有の相互關係は因果互に  
錯雜して、此現象界を發現し來つて居る  
のであつて、其内面關係は決して單純な  
るものではない、その如く、吾人と佛  
陀との關係もそこに複雑なる因果關係の  
存在せるありて、佛陀の出現となつたも  
のである。専門教義の上では種熟脫の三  
益と云ふて重要な問題となつて居るので  
あります、法華經の迹門の説く處に依れ  
ば、化城喻品の中に、大通智勝佛の十六

人の御子が、各出家得道して、智勝佛  
の法華經を覆講した事に其端緒を發して  
居る、時間的に言へば三千塵點劫の昔に  
迦拉ねばならぬが、此大昔に釋尊と婆  
婆世界の衆生とは緣を結んで居つて、  
夫れより今に至るまで、長年月の間に或  
ものは調養の機として成熟の益を蒙り  
或ものは得脱の利益を得、曾て佛陀に緣  
なきものは始めて佛陀に出逢ふて緣を結  
びて、下種の益を蒙るものありて、世  
世番々の出世は下種結緣の衆生をして化  
導を蒙らしめんが爲の故に、其因縁關  
係の深きことを知らねばならぬ、今化城  
喻品の要文を引いて釋尊を我等婆婆世界  
の衆生との間に特殊の因縁あることを申  
上げます、化城喻品に  
是十六の菩薩常に樂ふて是妙法蓮華經  
を説く、一一の菩薩の所化六百萬億  
那由陀恒河沙等の衆生は世々に生る、  
所、菩薩と俱にして、其に従ひ法を聞  
く、此文は能化の菩薩と所化の衆生とは、  
常に同じ處に生れて法を聞くと説かれた  
偈頌の中には「是諸の聞法の者在々々の

諸佛の土に常に師と俱に生る」と説き、  
「爾の時の聞法の者各諸佛の所に在り」  
と説いたのも同じ事、一旦緣を結んだ  
以上は、常に能化所化同じ處に生ると  
云ふのである、次に十六王子の化境を説  
いてあるが、最後に釋尊の化境を説いて  
十六は我釋迦牟尼佛なり、婆婆國土に  
於て阿耨多羅三藐三菩提を成せり、  
更に進んで、其時の所化の弟子の得益  
の有様を説いて  
我に従つて法を聞きしは阿耨多羅三藐  
三菩提を爲しにき、(脱益を得たもの)  
此諸の衆生今に聲聞地に住せるあり、  
我常に阿耨多羅三藐三菩提に教化す、  
爾の時の所化の無量恒河沙等の衆生  
は、汝等諸の比丘、及び我滅度後の  
未來世の中の聲聞の弟子是なり、  
(下種益を蒙るもの)  
とある、斯様に此婆婆世界は釋迦牟尼佛  
の化境として、釋尊を教主とし、其中の  
衆生は釋尊の御所に於て發心し結緣し  
て世々に説法教化の大益を蒙つて居るも  
のであつて、他の佛の御厄介を蒙つては



居らぬのである、以上は述門の説であるが、本門に至つては更に一層過去に遡つて、久遠即ち無始已來釋尊と此娑婆世界の特別の大因縁を有して、教主釋尊の本國土として、其化導の中心であることは、前節佛陀の顯本に於いて申上げた通りである、本門は述門の説をして一層其意義を深遠ならしめて、其に根柢を與へたものである、故に釋尊と吾々とは有限短時間の關係では無くして、無限絶大の大因縁を有して居るものである、此意に依つて法華經譬喻品には

(親の徳)

而今此處は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を爲す、(師の徳)と説いて、主師親三徳あるを明し給ふた壽量品には、娑婆世界は無始已來釋尊の化境なるを明して無始の主徳を説き、常説法教化と説いて無始の師徳を明し、我亦爲世父救諸苦患者と説いて無始の親徳を明して、其三徳の廣遠なるを明かされた、婆羅門教徒は大覺天王創造の世界な

りと言き、基督教徒はゴットの所造と説きて「主」と叫べども、大梵天王の主權は成劫の始已前には遡らない、ゴットの所有權も大梵天王已上には遡り得ない、然るに釋尊は久遠劫來、此娑婆世界に教主として、其主權を有せらるゝ、二十九劫と無始、有限と無限、到底其權利は争ふの餘地は無い、師徳親徳共に釋尊の夫れとは比較すべくも無いのである、爾陀藥師等の佛陀は其數多けれども、娑婆世界と因縁深き佛陀は一人も無い、教主釋尊を除き奉つては、各等と因縁ある佛陀も一人も無い、日蓮聖人は法華取要抄に委細に其義を論明せられた、今左に其文を

又諸佛の因位は或は三祇或は五劫等なり、釋尊の因位は三千塵點劫より已來、娑婆世界の一切衆生の結縁の大士なり、此世界の一切衆生は他土の佛の菩薩に有縁の者一人も之れ無し、法華經に云く爾時聞法者各在諸佛所等云云、天台云く西方は佛別に縁異なり、故に子父の義成ぜず等、妙樂云く、彌陀、釋迦二佛既に殊なる、況や宿昔の縁を別にして化導同じからざるをや、當世日本國の一切衆生の彌陀の來迎を待つは、譬へば牛の子に馬の乳を含め死の鏡に天月を浮ぶるが如し、法華經本門の意に依りて説く

梵主の云く、此の土は二十九劫より已來知行の主なり、第六天帝釋四天王等(私云)ゴツドも以て是の如し、釋尊と梵王等と始めて知行の先後之を諍論す、爾りと雖ども一指を擧げて之を降伏してより已來、梵王頭を傾け魔王手を合せ(私云)ゴツド膝を屈し三界の衆生をして釋尊に歸伏せしむる是れなり、(爾前經の意に依りて説く)

又果位を以つて之を論ずれば、諸佛如來は、或は十劫百劫千劫已來の過去の佛なり、教主釋尊は既に五百塵點劫より已來妙覺果滿の佛なり、乃至、此土の吾等衆生は五百塵點劫より已來教主釋尊の愛子なり、不孝の失に依つて今に覺せずと雖ども他方の衆生には似るべからず、有縁の佛と結縁の衆生と縁の佛と衆生とは聖者の雷聲を聞き

盲者の日月に向ふが如し、(法華經本門の意に依りて説く)

(編別遺文一〇三七八)

前段の文に一指を擧げてとあるは、天上天下唯家獨尊を唱へられたるを言ふたのであるが、畢竟大梵帝釋等の釋尊の教化に服従したのを言ふたのである、爾餘の文は熟讀せられれば其意味は了解出來様と思ふ、亦聖人は所稱抄(遺九〇四)に釋尊獨り主師親の三義を兼ね給ふを明されてある、左に其文を擧ぐる、

佛は人天の主一切衆生の父母なり、而も開導の師なり、父母なれども、賤しき父母は主君の義を兼ねず、主君なれども、父母ならねばあそろしき邊もなし、父母主君なれども師匠なる事は無し、諸佛は又世尊にて御坐せば主君にて御坐せども、娑婆世界に出てさせ給はざれば師匠にあらず、又其中衆生悉是吾子とも名乗らせ給はず、釋迦佛獨り主師親の三義を兼ね給へり。斯様に教主釋尊は娑婆世界の我等衆生とは無始久遠劫來切つても切れぬ大因縁を有して居るのである、我等が救済を求

むべき佛菩薩は他一人も無いのである、然るに不心得のものがあつて、我等とは縁も無き彌陀藥師等を尊信して教主釋尊を捨て奉るとは實に情なきことである、不孝不忠の最も大なるものである、日蓮聖人曰く、(下山鈔、遺、一五八四)

陀佛の日、八日は藥師佛の日と云云一佛誕生入の兩日を東西二佛の死生の日と成せり、是れ豈不孝の者に非ずや、逆路七逆の者にあらずや。我等は教主釋尊を三徳有縁の大導師と仰がねばならぬ、日蓮聖人一期の弘通は此意味を領解し徹底せしめんが爲めに努力せられたに過ぎぬのである。

### 宗教々育を國家最高學府内に特設すべき必要あり

文部大臣 岡田良平

世道人心が日に頹廢しつゝあるのは維新以後餘りに物質文明要求の爲に、思想の問題を開却したからである、殊に科學の萬能を認めたる學者、唯物主義にかぶれたる學者の勢力に壓倒せられて宗教の衰退したるに基くのである。世道人心を支配するには是非とも宗教の力に依るの外はないことが近來では一

般に認識されて來たが、それでも一たん衰退した宗教は再び容易に恢復しない、何故かと云へば、佛敎の如き其の興廢の基礎たる布傳者に其人を失つたことが容易に填補するの途を失つたからである。昔は兎に角佛敎各宗に於ても夫れ相應な興學機關があり、又個人の學園に人を修學せしめた方法に於て先づ宗教家



らしき宗教家も出来て居たが、俄に財源を失ひ時代の激潮に逆行したる爲に堂々一宗と誇稱する宗派にしてものが多し、之は種々な事情に於て止を得ない、否同情すべきことである、既に宗教に宗教家を作る機關を缺いて居て、而も宗教が人心の支配に力ありとして之を放任し、願わばならぬ人心の荒蕪するの當然である、故に之を憂ふるならば宗教家の養成に留意するの必要があるのである。

歐米諸國に於ても此に心づいて孰れも大學内に宗教科を特設し、宗教教育に力を施して居る、翻つて我邦を見たらば宗教教育は孰れも各宗派の自治に一任してある、たゞ一任したのみで何等の保護も加へてない、其結果現在五十有餘の各宗派は勝手に教育はして居るのであるが其の效果に於ては遺憾多しと云つてよいのである。

出来ることなれば之は國家が教育上の設備に應じて保護の態度を採らねばならぬ、その最も有力の方法としては東京帝大内に宗教科を特設するなり、若くは分

科大學の一科として新設するなりして各宗特有の教育は各宗派に一任するとして、も實めて共通の點だけなりとも國家最高學府に於て教育したき希望である。その

五五、不針金錢

紀伊南龍公に仕へし大儒奈波道圓の甥に、奈波加慶と呼ぶ針醫あり、御供にて紀伊にありし時、和歌山唯一の富豪島孫左衛門久しく病魔の爲に苦悶懊惱しつゝあり、此度奈波の來りしを幸ひと推舉せし人ありて治療を頼みけり、加慶心得たりと答へし時、頼みし人重ねて云ふ様、島孫は和歌山隨一の分限者なれば他の患者よりは特別入念に出精して治療あらまほしと、加慶默して之を聞居たるが、其人座を立んとするや、只今御依頼の病人見舞の儀御断り申すと答へしかば、頼みし人大に驚き、コハ心得ぬ事なり、療治

機微譚語

山根青村

致すと申されしは先刻のことなるに、手を反す如く断り給ふは如何なる思召にやと詰問しければ、加慶嚴然として云ふ様始は病人とのみ承りし故諸せしかど、富豪ゆえ精を入れて療治せよとの事にては御断すより外なし、拙者今日まで病には針を立てしかど金錢に針を立てし事なき故断り申すのみと、座にある誰彼流石は奈波殿の甥御なりと稱讚措かさりしとぞ。(良將百行錄)

五六、海鼠の俳句

廣瀬淡窓名は建字は子基豊後の人一代の詩宗なり、吟詠筆を起して淨書に至るの間推敲努めたるもの。曰く予詩を推敲するに就て悟入せることあり、予が父は俳諧を好み、其閑話に或人生海鼠の句を作りて曰く「板敷に下女取り落す生海鼠哉」と師の曰く善しと雖も道具多きに過ぐ再考すべしと、乃ち改めて曰く「板敷に取れし生海鼠哉」と、師の曰く甚だ善し然れども猶ほ未だし、其人苦吟すれども得ず、師乃ち改めて曰く「取れし取落したる生海鼠哉」と、予此話を聞て大に推敲の旨を得るを覺ゆ、是も亦悟の一端なりと。(淡窓詩話)

多く道に入らしめ得んとの道念こそ大切なれ、斯くて説く所は五題か十題にて可なり博學を氣取り多才を衒ふの要なし、十通ても百通ても同一事を何處までも練磨推敲縦より横より十二分の味あり力あるものたらしむる事肝要なり、大島袖の肌觸適合と着心地のよきに就ても思ひ知るべきなり。

聖語、一入再入の紅は染るに依りて色をまし、千顆萬顆の珠は磨くによりて光をます。(法華大綱鈔)

大正七年四月申余續統一語而有所感焉因是特賦之以致告於江湖諸彦併乞政 大阪 山田秀太郎

聖語、就中眞言宗等の流れ偏へに現在を以て旨とす、所謂齋類を本尊として男女の愛法を祈り、莊園等の望を祈る是の如き少分の験を以て奇特とす、若しこれを以て勝れたりといはゞ、彼の月氏の外道等にはすぎじ。(星名鈔)

況んや教壇に立ちて道を説き信仰を奨むるもの一段緊約の考慮なくして可ならんや。敢て巧手を望むべきにあらず、ヤンヤと拍手の聲ありとてゆめ己惚根性を出すべからず、組織構想もさることながら要は自己を空ふして、佛祖御冥助の下に其所説に力あらしめ、如何にせば一人も

音價銀銖之泉布以不購請一語何一掃客氣露千金而不措思是畢竟何物少壯之時吾卑風惜財私清尤藥物屢陷危險猶不悟克己復禮爭似佛如覆薄冰自體危頼聖助今稱和榮枯盛衰繫天命人間提此心宜財之集散數難運轉願財重義德終五



# 釋尊一代の概要

松尾 鼓城



課題「家」表

子爵 清岡長言選

○天 千葉縣東金町 万新舎一止

年をへし誰か住家そ世のうさも見えぬ深山の松の下かけ

○地 下谷區中根岸 小柳 律子

たそがれに友と別れてかへりきし吾家の軒のなつかしきかな

○人 千葉縣長柄 渡邊 乾航

世の中の事はしらねど足曳の山家もすめば都なりけり

○佳 作

○雨露を凌ぐばかりの家ながら住馴しこそ心安けれ

○山たかく雲にそびゆる八重垣はたか妻こめのやかたなるらん

○身は輕し家は重しと御祖よりうけし教をまもれ家の子

下 總 星野 聖祐

合はぬと弱音を吐く連中ばかり計算すれば地球上に幾億といつて住んで居るのであるからね。

## (一) 八相成道

釋尊の一代、これは八相成道、その一代を八ツに分類してある、それで大體は分る。

(一) 下天 (二) 託胎

(三) 出胎 (四) 出家

(五) 降魔 (六) 成道

(七) 轉法輪 (八) 入涅槃

陸地が一番大きい其中央の地を占めた印度の地は今から四千年以上の文明國であつて、殊に哲學宗教は釋尊出世已前を以て極度に達して居る、其當時其宗派のみても九十五種を數へ得るといふから推測するに足る。かくて其印度の中に於ても文治國たる迦毘羅國の國王淨飯を父と

## (二) 緒言

佛道といへば釋尊の一代に基因して居るのである。前佛とか後佛とか、種々の佛が無限の時間と十方に活動したことが説いてあるが、それ等の事に就ては姑らく我々は聴く耳を塞ぐことにする。而して我々は、三千年前に同じ我々の土の上の印度國に勝れた人間(佛)と生れて來て多くの人間の總ての欲求の満足に應じた釋迦如來御一人を知ればよいのである。それも委しく云へば限りがない、五十年間の大説法を基礎とした釋尊の一代は抱宇宙の理想境であつたなら是亦無盡の事であるから成らう事なら之れを一口に聽きたい。たゞ一口にと早合點の出來ることを要求するやうだが、現今表面は意地を張つて居るもの、内心全く根柢の薄い人間ばかり、六ヶしい理窟はとて歯に

し賢明なる摩耶を母として出られたのが太子悉多後に佛陀釋迦である。其時代の要求として釋迦の如き聖者が出來べく來る運命、而して之を宗教的に下天といふのである、之れには前佛、因縁、さまざまの關係を傳へて居るが、要は生るべく時代の應じたのである。摩耶は日輪懷に入ると見て胎懷した。一説に白象が宿胎したともいふ、この瑞祥は即ち託胎である。隣轉樹の下、王妃耶摩から出產した釋迦は生るや種々なる奇瑞を背景として七歩し天上天下唯我獨尊三界皆我當度之と唱へた、生れながらにして救濟主の宣言をして居る、之が出胎である。刹帝利と波羅門を兼ねたる優等種族を家とした釋迦悉多は、どうして一度は宗教家たるべく運命を有つて居た、しかし萬事に聰明な英達な悉多太子は十七歳にして耶輸陀羅を娶り子羅睺羅を生んで四隣を威服する名望をもつて居たが、それで自己天來の約束たる出家を速めて十九歳にして山に入つた。それには度々眼にふる、病老死の無常なる諸苦の解決をなして、自己の満足を得ると共に人衆の苦

を救はんとの慈愛心と勇氣とを起したのである、それが所謂出家である。かくて山に入り林に往く、之も同じ目的の覺道を成さんが爲に其道の長者、一代の名聲ある學者に就いて殆ど死に瀕するの難行苦行の結果、從來の波羅門の修行及び諸哲學は自己の本懐を達し救ふに足らないとを觀破した、さればいかでか其一切人類の救濟を爲し得やうやと知て、爰に自ら決すべく大勇猛心を起して菩提樹下の最後の大覺期に入つたのである。此場合釋迦が覺悟すれば精神界の暗黒は開かれて光明に輝くとになる、夜は太陽の出るに依つて明白になる如く、それでは關黒を住居とする魔は領域を失ふことになる魔としては勢ひ悉多たる釋迦の覺底を妨害せねばならぬ、此に於て魔はあらゆる悪手段力の限りを傾けて之を妨げたが釋迦は魔の何ものをも排し退けた、之を降魔といふのである。かくて太陽の東天に照々乎として雲を照破して昇るが如く曉天の爽快なる氣分に満ちて多くの瑞祥の中に釋迦の太陽の出現は地上の暗黒を消したのである、これを成道といふ、こ



れぞ釋迦が三十歳の時である、十九で出家、十二年間修業の結果である。十九出家、三十成道には異説があるが、通説であるから之れに據つて置く。こゝまで六相である。

釋尊は成道正覺した、即ち佛位の妙覺者である。自己の無始よりの覺體であることを知つた佛陀は、今は人衆の救済に向ふのが仕事であるが、群生の觀機都合で七日間三昧に入つた、かくて起つて華嚴經を説いた、これが二七日、已上都合三七二十一日間であつた、釋尊は其の包藏の極底を打ち明けんとしたが、永く諸學説に醉へる哲學者宗學者には兎も徹底的共鳴が求められぬと知つて、更に波羅門派の學説を應用して徐ろに眞理の極に誘引しやうと考へて爰に四阿含經を十二年間説いたのである。それから方等諸經を説いて過説の小乘なることを示し、恥小慕大の心を起さしめ漸次誘導して般若經を説いた、此間三十年である、方等十六年説と八年説と、般若十四年説と二十二年説とあるが、これは何れも淺より深きに誘つた事實は一筋で

ある。次に全く調機調養したる結果、八ヶ年法華經を説きて隨自の究竟を明し、更に一日一夜涅槃經を説いて捨捨し盡した。此間一屬父子等及一切人衆に向つて皆迷情から醒むべく師子吼をして居る。之れが即ち轉法輪である。かくて人天三界の大救主釋尊は八十歳にして沙羅雙樹の下に大涅槃を示した、假りに人間の眼界から去つて、永久の光明救手は經典として靈存し、盡さざる人衆の長時間に無限の救済を垂べく假滅したのである。前から生きて居た本佛釋迦は新に無き處に突如として生れなかつた如く、永久の釋迦は又突然として死滅するものでは無い、大釋迦久成佛は三千大千世界に満ちたる慈悲を一ばいに擴げて只假りにかくれたのであつた。これを涅槃といふのである。これ釋迦の一代はマア一寸一口で語つたわけだ。

取り入れしはだか掉あり花字津木 周 女  
卯卯の花や洋種の鶴の雌を呼ぶ 某

### ●本多祝下の微恙

去る三月祝下には關西地方を遊説され、歸京後發熱あり、音聲少しくしはがれて、統一開の演説の如きも何となく物憂しく聴かれたれば、信徒は大に心配し、中にも安川刀自の如きは井村講師を通じて祝下の御保養をすゝめ其費用を供養せんと申し出らるゝ等あり。客月初旬、野口、今成、鈴木、征川、井村、國友、石川及び松尾等の諸氏は統一開に會合し、祝下に對し御保養をお勧めすることを決議し其委員として今成、征川等の諸氏祝下の自坊品川妙國寺に到り法團の爲め懇願するところありしが、祝下は法團多事の時、我微恙の爲に靜地に安臥するに忍びず、然れども諸君の好意も亦もだしがたし、故に半は靜養の心に住して爲法盛すとこあらんとし、事止むなく有志に於ては其頃豫定の名古屋の觀戲、並に豐橋團圓の布敷を中止する等、聊かにも御身體の安靜を計りたるも何分目下大藏經要義の編纂に加ふるに、一日として殆ど寧日なきが如く講演あり、門人信徒の苦勞一方ならず、此事に就ては佐藤閣下よりも御保養をおすゝめありしといふ。尙祝下には一時身體一貫目以上の減量なりしも今や殆ど舊に復されたりとぞ。

### ●東金の六六六年回 の對旭日唱題

千葉縣は宗門の大御なり、徳川三百年間の状態は大御の深き眠りに着きたるにてありしなり。深き眠りより醒むるものは却て快晴の氣に充たん。巨卿今や眠より醒めんとす、吾人は其の吼聲の大なるものを待つこと久し矣。

十一日 妙滿寺大法會修行 音樂法要財團祠堂  
法要本年は地方益壽者の爲に朝説教ありて感動を興へたり。

午前六時半 説教	萩原本山部長
開會の挨拶	鈴木法務部長
午後二時 説教	萩原部長
現世安穩	萩原部長
午後七時 演説	萩原部長
開會之辭	萩原部長
悲痛美と日蓮主義	江見乾丈
善き教	中原通應
我が國家の生命と佛敎の中心點	石川顯隆
力ある信仰	國友日城
十二日 朝 説教	原田日男
信仰に關する一紙	原田日男
午後一時管長本多大僧正現下導師にて明治天皇七周年	

### ●本山妙滿寺會式

葉縣の一角より眠りの一醒鐘を許せんとす、豈獅子の眠りを醒すの前駆にあらざらめや、果然、四月二十八日揚ヶ峯に於て、過る六百六十六年の昔、建長五年四月二十八日早朝、日蓮上人が清澄山頂に旭日に向ひて唱へられたると同様の心地に立つて題目を合唱す、時刻實に朝四時三十分なり。西福寺の鐘樓堂に集りたる人は皆是れ、唱題修行、報一切萬法洪恩の元氣なる信士女なりき。飛龍結言して曰く  
一天雲なく微風なし  
天地感應佛天加護  
唱へ奉る南無妙法蓮華經  
天皇陛下萬々歳  
一會大衆五百人  
旭日輝き出づる東海天  
當日の氣分察すべし。



### 春乙の櫻花

加藤圓順師は生花なども生けられて風流格のある僧侶である。其人が偶然にも靜岡縣の二川妙泉寺に住職せられた。同寺は風流格としての觀事に因める寺である。客月會、記者豐福に至つて同市の新聞に掲げるところの左の一文を見、之を轉載することとする。但し風流格は死風流、風流息は活風流、加藤君幸に後者に於て願本的清僧たれ。(一記者)

瀨美郡二川町の妙泉寺と云ふは二川郡より十町ばかり東方町の外れに在る日蓮上人の大檀越波木井六長實長の曾孫甲斐國身延山五更鏡阿闍梨日蓮上人の開基で今より六百餘年前貞和年間關東海通往復の砌二川宿東端田中の郷に敎藏庵室を創立した寛永より明曆に至る頃中興開基觀正院日意上人日蓮宗より願本法華經に轉籍し敎藏庵室を改め信龍山妙泉寺と稱し萬治三年田中郷より現在の所に移轉して今日に及んで居る。開基日蓮人常に櫻花を愛玩し庵庭前に櫻樹を植ゑ賞觀す萬治三年寺を移轉すると共に櫻樹を祖堂の前へ移植し春華爛漫の頃は公卿士庶風流人の來り遊ぶも多し八橋の杜若と比べ稱せられた安政五年彌生の頃、關東郡北小路正三位説光師東下向の折柄此妙泉寺に立寄り觀賞惜かず日蓮上人の幼名春乙齋に

本郷 鹿島長之助  
青柳のいと美しくしきわが宿にわすれもつらて友のとひくる 日本橋 鶴見きく子  
いかめしき外國ふりの家つくり幾千萬の金になりけむ 丹 後 廣岡 圓  
家の長心の柱なをければかたふく家はあらしとそおもふ 千葉縣 龜島 正之  
たらちねの親のたてたるわか家を去りて都の住居かな 東京府 立川 長重  
風呂買ふ人も訪ひ来て山かけの庵も賑はふ雨の降る日は 長野縣 太田 篤夫  
星ふみてかへる夫の疲れをはいやすは家の力なりけり 名古屋市有田 信子  
三界に家なしと云ふ法の師の家こそつよき家こそなりける 同 有田 健山  
よもぎ生のやとにすみても人心直く清きそとうとかりける 靜岡縣 佐原 弘風  
今は早みるかきもなくちりにけりいみじき人の住みし家居も 青 森 富田 實雲  
かくて世にならふかきりかひなれの駒すら家はわすれさりけり 下 谷 小柳 英夫  
我宿は都はなれし里なれど子賢とみてにきはひにけり 小石川 松尾 周子 選 者  
雨露をしのかかりのくさのやも  
こゝろやすきそらちやまされける

### 次題「山家夏月」



年報恩音樂大法要勤修 野口總監國語奉白文を朗讀  
莊嚴なる法要を修せり。

午後三時 説教 野口樞大僧正  
開祖什正報恩説教  
午後七時 演説 石井 尊 應  
我が祖の立教開宗 武田 顯 龍  
建國の理想と宗教 本多大僧正親下  
日蓮主義の眞價  
十三日 朝 説教 管長本多親下  
法華行者の心得  
午後一時 總監御音樂法要を行ひ萩原本山部長説教あり。

午後七時 演説 加藤 義 準  
慈悲を知る者 胡 倉 俊 達  
法華を知る者 松 本 堅 晴  
宗祖の警策 野 口 日 主  
日蓮主義は四恩調節の修養及信仰  
閉會之辭 本 山 部 長

右前後三日間の法要演説は近年稀なる盛會にて、地方の參詣者も例年になき多数なりしは宗運漸く繁盛に入るの證なり。就中毎朝説教の功果は多大にして、各教區登山布教師は得意の辯舌を振ひて感動を興へたり。三日間の演説聴衆は千有餘名なりき。終日は慰勞會を開き、萩原部長、布教師、法要部、信徳總代挨拶、野口總監の所感等ありて萬歳三唱の後解散す。尙參詣者へは本宗祖書要文集と信仰心の徳と力とを施本せり。

### 東北監督布教

(國友日斌師一行)

○羽前 梨郷 本覺寺

四月廿一日、千葉縣下の布教を終りたる、文學士監

督布教師國友日斌師は布教師成島日衛氏を同伴、午前七時五分上野發列車に乘じ二本松に向ふ、然るに同地は二十日夜大火の爲、全町烏有に歸したれば、混雜を避け止むなく踏路之が視察を爲すべく、出迎人証本春義氏にこの旨を告げ、直に羽前長井驛梨郷本覺寺に到る、翌廿二日午後七時より講演、開會、宮代山主、次て成島、國友兩師の講演あり、同夜は降雨にも拘らず、聴衆は山路を物ともせず集集し來り熱心に敬聴したり。

### 盛岡 法華寺

二十三日午前七時、本覺寺山主及總代人、鈴木乾藏氏等に見送られ盛岡に向ふ、同夜九時三十分、水澤驛に到れば同寺總代人並に地明會幹事の出迎を受け法華寺に到着、翌二十四日、午後一時より講演、又午後七時よりは同市劇場「藤澤座」に於て、開會、地明會長、富山小一郎氏、次て成島、國友兩師の講演あり、聴衆四百名、非常の盛會、午後十時半閉會、講演後、講師國友師の爲に、特に公園日盛軒に於て、地明會々員一同は慰勞の宴を開かれたり、猶同市地明會は熱烈なる求道者の一團なれば、その指導よろしきを得れば、將來好成績を擧るを得ん、次に法華寺總代人「富善次郎」氏は特に國友師を招聘し亡父追善の趣向を乞はれたり。

### 八戸 本覺寺

二十六日午前六時、山主、地明會員、總代人等に見送られ八戸に向ふ、既既内詳に到れば總代人及中田山主等出迎られ、特別仕立高等馬車に乘じて本覺寺に着、休憩、修法、午後一時よりは、同市劇場、東北第一といはれたる「錦座」に於て講演、開演に際し眞宗僧侶、龍島禪靜氏は進んで開會の辭を述べ、次て成島、國友兩師の講演ありたり、尙國友師の講演は大に感動を興え七百の聴衆宛も醉るが如く午後五時閉會、同市は興、淨土の兩宗を以て優勢の地なるも、曾て本多管長親下、瀧錫以來日蓮主義の氣運大に勃興し、他宗講演に至り

ては、まゝ流會の止むなきに至るとしば、ありといふ、然るに日蓮主義講演に至りては何日も滿員の盛況なりとは、如何に吾が日蓮主義の氣運が世を擧て歡迎せられたるかを推知すべき也、翌二十七日は同寺に於て午前十一時を期し國友師導師にて「日什大正師」の御報恩を修し、次に同寺家總代人、「加藤貞藏氏」は、今回祖先追善の爲、同一反二試十歩、時價三百五十圓餘の土地を寄附し、先般來管長親下より本尊並に貧狀の下附ありたれば、國友師今長の布教を幸に同寺法要後、莊嚴なる傳達式を行ひ、午後一時より、成島、國友兩師の講演あり聴衆四百兩回共至つて盛會、午後三時五十分、中田山主、總代人等に見送られ、尻内驛に於て最後の別れを告げ、鐵路驛として二本松に向ふ、(同地の新聞に傳ふるものありしも重複するに付略す)

### 二本松 蓮華寺

二本松に着せしは、廿八日午前二時中、それより蓮華寺に到り山主米羅氏に會し、類焼の原因、其當時本尊等の取扱に關する事情及燒跡の慘狀を視察し、更に本久寺に到りこれ又寺院の狀態を視察し午前七時、佐本、米羅兩氏に見送られ、會津、若松市に向ふ、因に記す、今回蓮華寺の類焼に際し、山主米羅氏の九歳に於ると十四歳になる兩少女は、一は過去帳を一は蓮祖の像を背負ひ避難せりとして、同地の美談として傳へられる、斯くして教家の家庭は信仰的氣分を實現するを得ん、然るに此等住職家庭の美談を贊し、全町大火の災時にも拘らず、既に六百餘圓の豫算を以て堂宇の再建に着手せりとほさもあるべき也。

### 會津 妙法寺

二十八日午前十時中、若松驛に到るや、總代人等出迎られ妙法寺着、同寺に於て、翌二十九日、成島、國友兩師の講演あり盛會なりき、翌三十日午前四時五十分若松驛を發し宇都宮法華寺に向ふ、既に宇都宮驛に到れば、法華寺山主、大川圓精、其他各寺院住職等

出迎られ、正午十二時同寺着、修法、國友師は、信仰、布教、寺院經營等に對して懇篤に訓示を爲し、午後一時より、

### 宇都宮 公會堂

に於て、開會、大川圓精、次て、成島、國友兩師の講演あり、國友師は日本魂の發揮と國運魂とに於て大に論じ、參議の特校等に大に満足を興えたり、尙同日國柱會々員等も出席盛會なりき。次に三戸、青森等の諸氏より今回の布教を幸ひに國友師の講演を歡迎せられたるも、時間に餘裕なきと共に、五月一日より宗會の開會に際したれば一先づ歸途に着けり。(隨行員記)

### 豊橋市の教演

豊橋妙圓寺住職松本監時師は昨年赴任以來同地に對し大に教勢を振るべく時機を待ちつゝありしが、客月六日、七日の兩日に亘りて大布教を試みたり。是より先、同師は同寺舊院の新築を成したるを以て之が成業を期して祝賀法要を兼ね、明治天皇大法要を營み、併せて國民思想の講演を聞くに至れるなり。此の開會に就ては末記同寺且家の有志の盛力の外に細谷市長の暗中飛躍ある等にて又新聞廣告等豫定の準備整頓したり。六日午後一時野口日主師導師として法要あり、金光學碩師先席にて野口樞大僧正の説教あり。夜は左の諸師の講演ありたり。

開會の辭 加藤 圓 順  
逆境と日蓮上人 江 見 乾 丈  
有形無形の寶 野 口 日 主  
日蓮主義と喇嘛教 野 口 日 主  
午後一時半より八丁高等小學校に於て國民思想大講演を開く、  
開會の辭 文學士 滿井信太郎先生  
思想界の維新 松尾誠城先生

因みて春乙の櫻と命名し給ひ此寺の御法の花と開くなる櫻は世々の春とおとなふと誅し三組盃まで賜りしとか爾來春乙の櫻の名高くなりて遠近の名士雅人杖を曳くもの多くなつた此寺には、  
■芭蕉翁の遺跡日蓮上人親刻の大黒天像説光廟其外公廟諸名士の筆跡も少からずとかて隠れたる古跡として一遊を試むるも詩趣が深い。

### 俳句募る

題 胡瓜 (きうり)  
編蝠 (かほり)

○廿八日迄に着の事  
○みたから紙上に載す  
送り先  
東京小石川白山前町  
統一編輯所

○成るべく評を加へ掲載すべし

一佛一王主義 樞大僧正 野口日主師  
三大自覚 大僧正 本多日生親下  
同夜は妙圓寺に於て本多、野口、松尾等諸氏の講演あり、同市近來になき法雨の洽悦を見たり。來賓の主なる人は、加藤第十七族團長、吉橋騎兵第四族團長、細谷市長、山崎第四族團長、吉橋騎兵第四族團長、より明治天皇第七周年大法要を謹修す、大僧正本多日生親下大導師たり、野口師は左の奉白文を讀まる。

### 四月七日明治天皇第七周年 大法要奉白文

茲ニ櫻花之候一乘醍醐ノ法味ヲ供ヘテ  
明治大帝尊徳ノ七周年報恩法要ヲ修シ奉ル 嗚呼明治大帝尊徳ハ不世出ノ御英資ヲ以テ大統ヲ御繼承アラセラル  
皇祖皇宗建國ノ宏謀ニ依リ内維新ノ大業ヲ成シ外日清日露ノ大戦ヲ經テ國威ヲ萬邦ニ宣揚シ大業方ニ完成スルニ際リ遽然トシテ御登遐アラセ給フ國民情ト天哭ノ地悲然何ソ堪シ雖然法華經ニ所謂爲度衆生故方便現涅槃爲教故示涅槃之天御心ナリト拜シ奉ル國民熱淚未ダ乾カザルニ早ク七周年ニ相當セリ之レ法要ヲ嚴修シテ御菩提報恩ニ供ヘ奉ル所以也今ヤ世界大戦方ニ酣ニシテ人類ハ一時ニ地獄餓鬼畜生修羅ノ苦ニ墮ス獨我大日本國ノ安穩慈樂ナルハ偏ニ御稜威ノ賜ナリ雖然世界大戦ハ未ダ其終熄ヲ知ラズ露國ノ現期ニ依リ敵軍勢力漸ク極東ニ迫ル國民タルモノ豈苟且偷安ノ時ナランヤ我等國民ハ  
大帝尊儀ノ御遺教ヲ奉戴シ  
今上陛下ノ御勅諭ヲ奉體シ東洋及世界平和ニ貢獻セシコトヲ奉誓今奉安置閣下統一ノ大本尊所修二念三千之南無妙法蓮華經四衆所奉ノ世界ノ中樞大日本國豊橋市蓮立山道場也感感應納受玉ヘ  
大正七年四月七日 事智愚院日主釋首々々

### 本教演の盡力者



其他官吏にして、盡力者の主立たるは左の如し。服部彌八、服部平之助、黒川莊次郎、加藤勝次郎、伊藤兼吉、神谷由平、倉橋太七、横田常次郎、戸田御吉、細谷忠男の諸氏なりき。

### 七里法華本行寺の改築

千葉縣濱野本行寺は泰師の靈場として有名なるが、同寺住職中村日錦師は今聞之れを改築を思ひ立ち、別紙の如き寄附金募集趣意書を發表するや、同寺信徒にして、東京日本橋伊勢町王子醸曹肥料會社取締役にして、瀧田屋たる小西安兵衛氏は直に金三千圓を寄附せられたるが如き有様にて目下千葉縣全體に對し寄附勸誘しつゝあれば、漸次其額も豫定額に達すべく、かくて改築成るに到らば七里法華根本道場として其威風を保つに充分ならん。

### 寄附金募集趣意書

抑も當寺は今を去る四百四十餘年前、日本宗教史上一大奇蹟として其の偉影を放てる上總七里法華の本靈場にして、現存の本堂は七里法華開基の大導師日泰聖人の創立、舊土氣城主酒井定慶公殿修造の堂宇、而して泰師靈廟は三百餘年前の建立に保れり、爾來風雨飄飄秋時修葺に歳を重ね今日に至りたりしが、現時雨御堂の腐朽破壞最甚しく、遂に修繕改造に着手せざらん乎、七里法華根本の靈跡遂に埋滅せん事を憂ひ、檀信の協力を重むと雖も事業大にして資金を要する極多し、然れども推再日を空くせば願更に倍重する所以なるを以て今同寺且懇請の結果、泰聖の威徳を感仰せる檀信は勿論縣下大方の有志に訴へ、其の喜捨淨財に據り一大修繕を加へんとす願くは應分の寄附あらん事を、敬白

大正七年 月 日  
七里法華根本靈場本行寺  
傳燈沙門 僧 正 日 錦

### 天晴會

天晴會は左の講演ありたり。  
二月神田一ツ橋學士會にて  
儒教と支那國民思想  
文學博士 服部宇之吉君  
三月神田一ツ橋學士會にて  
日蓮主義の信仰及び信仰の効果  
僧 正 關 田 日 城 君  
四月統一閣にて  
歐洲各國觀察所感  
法學士・丸山 勉 吉君  
●喇嘛僧來 四月六日喇嘛僧觀光團東京に着し七日淺草本願寺に於て佛教有志の歓迎を催したり。  
●日蓮主義 例月講演會  
統一閣四日市分團にては四月七日午後六時より同市内南町新地座に於て例月會を開きたり陸軍歩兵中佐堀野寛氏の演題は「世界の大勢と日本國民の覺悟」にして要旨は世界の大勢より歐洲戰亂の概況を叙し歐洲戰

### 自慶會本部主催會

四月十五日午後一時より本部主催會を和樂堂に開催す、順序左の如し。  
開會の辭 高木 本願先生  
軍人の本分と自慶 小原 陸軍少將  
自慶會の精神 松尾 鼓城先生  
此間餘興として浪花節東家小樂遊、琵琶生方旭昌、落語、桃川蝶子の講談、竹本鏡昇、綾原等の演藝ありて散會せり。此日櫻花爛漫の時に郊外遊旺んたりし時なりしも來會者比較的多數なりき。

### 横濱船渠會社

同會社は、他方より講師を招きありしも爾後自慶會にも依頼して第一第三の火曜日を以て思想講演を依頼し、四月十六日は、岩野理事、關田日城講師講演せられたり。五月三日は臨時會として本多日生講師講演せられたり。

### 横須賀海軍工廠

横須賀海軍工廠には毎月二十九日定期に本多日生師の講演あり、四月は本多師に前講として岩野理大監出演せられたり。  
●神奈川縣 足柄下郡中村小竹受教寺住職は小原正恒將軍を聘して思想講演を催したり。

### 自慶會

●自慶會  
●自慶會

七里法華根本靈場本行寺  
傳燈沙門 僧 正 日 錦

●自慶會  
●自慶會

### 自慶會

●自慶會  
●自慶會

五月一日夜六時より淺草區清島町統一閣に於て本部主催會を開く。  
開會の辭 松尾 鼓城先生  
福の神 造船大監 岩野 直英先生  
勤め人の心得 海軍大佐 市原卯之助先生  
餘興には落語、奇術、常盤津、桃川蝶子の講話ありたり。

### 自慶會京都設立

京都自慶會は岩野氏義に出張打合せありしが、四月十五日午後零時半より、市立公會堂に於て其の設立大會を舉行したり次第書左の如し。

- 一、開會宣言 司會者支部副長 大野 龜都
- 二、國歌(君が代)音楽合奏
- 三、教育勸諭抄讀 支部長 木内重四郎
- 四、自慶會趣意文朗讀 本部長 矢野 茂
- 五、設立經過報告文 九茂 藤平
- 六、祝辭 内務大臣。大藏大臣。農商務大臣。逓信大臣。京府知事。大學總長。鎮守府司令長官。大阪砲兵工廠提理。檢事正。京都市長。
- 七、會歌(國の聲)音楽合奏 鐘ヶ淵紡績株式會社女工
- 八、演 義 太夫 本多 日生
- 九、演 話 義太夫
- 十、演 話 伊豆 凡夫
- 十一、演 話 伊豆 凡夫
- 十二、演 話 伊豆 凡夫
- 十三、演 話 伊豆 凡夫
- 十四、萬歳三唱
- 十五、閉會の辭

### 宇都宮軍隊布教

●宇都宮軍隊布教  
●宇都宮軍隊布教

### 伯耆市橋家と教勢

伯耆市橋家は宗内有数の長者にして同家にして眞に信仰界に盡さるゝに於ては山陰方面の教勢も大に面目を一新するに至るべく、過般同家法要中に説法教化の清進を期せられたる如きは未曾有の事なりと、今回約壹萬圓の豫定にて新に佛間の新築を計畫されたるが、這は總てに模範的たるべく、本尊は文字式か木像式か未定なるも工事落成は約一ヶ年を要すべく、此の工事落成入佛供養と共に山陰の天地に布教上の法眼を見るに至らんとす。  
▲記者曰く 本尊は成るべく文字式を希望致します。

### 釋尊降誕會(統一)

四月八日午後一時半、喇嘛たる音楽起り、今成權大僧正は、一會の大衆と共に着座せらる、其の差定左の如し。  
一、音楽 二、三寶燈 三、勸請 四、方便  
五、自我偈 六、自調 七、散華 八、音樂(燒香)  
九、題目 十、回向 十一、受持 十二、三歸  
十三、音樂、退座  
出座僧員  
今成 日贊、山根 日東、笹川 日堂、森川 寛行  
堀木 日種、佐藤 重賢、池澤 日辰、熊井 本光  
大須賀玄遊、森 義親、山 津、井村 日成  
木村 義明、高木 本願  
講 演  
釋尊降誕と現代の世界 志田法學博士  
南無釋迦牟尼佛 井村 僧 正

### 開宗記念要法に大講演會

四月廿八日午後一時  
法華經流布の時代 小林 一郎先生  
開宗第一の本尊此國に建つべし 野口 日主師  
●寄附金 總額八拾八圓九拾五錢  
一、金拾五圓宛 宗務廳 講妙會  
一、金拾圓宛 地明會  
一、金五圓宛 妙道會 正法護持會  
一、金壹圓也 身護會  
一、金貳圓宛 玉川由太郎氏 中澤平五郎氏 窪田 貞二氏  
一、金壹圓宛 央倉諭一郎氏  
一、金壹圓宛 坂 本氏 山 西氏 龜井 利一氏  
長 谷 川氏 小 泉氏 松 丸氏  
浦 井氏 大 原 亮氏 石 山氏  
丸 山 中唐氏 山田豐次郎氏 幅 政吉氏  
岩野 直英氏 竹下龜太郎氏  
一、金五拾錢宛 大塚 德氏 外十九名



一金三拾錢宛 林氏 外四名  
一金貳拾錢宛 西村氏 外五名  
賽錢 七拾五錢

### 統一閣講演

▲四月七日、日曜講演  
佛陀の力用  
佛陀の功徳  
佛教と人生  
聽者 二百餘名  
▲十四日、同  
釋尊と佛教  
佛陀論餘論  
人生の側面觀  
聽者 百五十名  
▲廿一日、同  
日蓮主義成佛の意義  
人力、天力、國力  
日蓮主義綱要  
聽者 五百名

●京都教信 一日は本山國總會、三好信通師の信仰あり。二日は護正會にて萩原部長の壽量品禮講あり。當月は例年の大法會あり(別出)京都の布教會爲に大に賑ふる、十四日午前十時財團評議員會を妙滿寺に開く。廿八日は本山婦人會にて三好師は法華信仰の心得を演説す。

●千葉縣教信 第七教區に於て六年度定期布教を開催せる事左の如し。  
一、三月二日 福岡村飯島寺に開會地方青年の會するもの四十名。開會の辭「龜崎日憲。多力と青年」小竹俊雄。皇室に對する信仰意識「土屋布教師。

一、三月十三日 福岡村常福寺に開會。開會の辭「倉上耀榮、信後の生活」廣部乾山。時局と日蓮主義「龜崎日憲、信仰の極致」土屋布教師。  
一、三月十五日 福岡村法藏寺に開會。開會の辭「久松光道、理想實現の方法」廣部乾山。護法的愛國「小竹俊雄。日蓮聖人の聲」栗原顯有。眞修養「土屋布教師。  
一、三月十七日 福岡村善立寺に開會。開會の辭「小竹俊雄、立正安國の意義」栗原顯有。建國の精神「龜崎日憲、眞修養(其二)」土屋眞容。  
一、三月廿一日 片貝村本隆寺に於て彼岸會執行。信仰の功徳「土屋眞容。  
一、三月廿七日 片貝村教行寺に開會。開會の辭「藤田圓壽、感應」小橋親正。活佛教「土屋布教師。  
一、三月廿八日 片貝村公開堂に於て監督布教師の巡教を聞く(四月號、監督布教小關妙覺寺の處に掲ぐれば略す)。  
一、三月卅一日 豐海村淨泰寺に開會。開會辭「花澤昭泰。法華經主義の實現」德會映。國民の根本問題「龜崎日憲。道念の感化」廣部乾山。根柢ある修養「土屋布教師。  
一、四月十一日 正氣村開福寺に開會。開會の辭「鶴澤輝通。社會改善と日蓮聖人」土屋布教師。

●市原通信 四月十三日市原郡津村本寺に於て、舊十三ヶ村より成る俗稱「野談談」と號する萬人講を例年の通り執行したが、花見期節なるを以て參拜者十間四面の本堂に立錫の餘地も無き程なりき、講演は左の如し。  
學生 道 黒須無外師 鶴澤純貞師  
人生と宗教

●山陰通信 宗門第一の富豪なる松崎本立寺檀頭市橋龜藏氏は昨年逝かれし故夫人春子の遺善法要を四月一日より四日迄町重に營まれたり、導師は朝倉俊達師にして四日間亘り會する僧員十二名、五種妙行十種の供養を莊嚴を極めたり。  
朝倉俊達

先づ迷信を去れ  
信行 廣瀬信光  
袈裟の意義 結櫻開章  
佛敎研究に付きて 吉永慶順  
將來の宗教 石指惠仙  
五蓋に付きて 朝倉俊達  
日蓮主義信仰 吉永慶順  
大藏經に現れたる佛陀 石井寛俊  
四月十日 照量數園本立寺に會合、法要修行後登山代表者二名は住職朝倉師に伴はれ夜行にて本山に向はれたり。  
同二十日 本立寺にて荒尾家道善法要後に「日蓮上人の人格」に就て、朝倉俊達師演説ありたり。  
二十八日 因幡國青谷町高等小學校にて日蓮主義者主催の講演會にて、同師の「日蓮主義より觀たる國民道徳」の題下に演説さる。  
三十日 同所養氣館にて同じく「日蓮主義者の態度」の講演あり。

●身讀會擴張 身讀會は今如左の如く會則を改正し、以て擴張を計るといふ。尙四月三十日は例會を開き松尾先生以下の講演ありて解散せり。  
身讀會々則  
第一條 本會ハ我國體ノ眞意ヲ了得シ國民ノ本分ヲ務メ又日蓮主義ノ正旨ヲ遵奉シ正シキ信仰ニ入り併セテ精神ノ修養ヲ積ムヲ以テ目的トス  
第二條 本會員ハ誠意ヲ本トシ實業ヲ旨トシ言行一致ノ實ヲ舉ゲ各事ニ總テ模範的行爲ヲ現スニ力ムル事  
第三條 本會ハ毎月二回例會ヲ開キ本會ノ主目的ノ到達ヲ期スル事  
師ハ當分牛込區區町十六番地岩井井庄三郎宅トス講師ハ主任ヲ松尾鼓城師ニ委任ス  
第四條 本會員ハ異體同心ノ信義ヲ守リ親睦交誼ノ情ヲ表ハシ若シ會員中ニ不詳事アル場合ハ適宜ノ慰安方法ヲ實行スル事  
但シ慰安ノ準備方法及ビ例會ノ費用ニ充ル爲メニ

●美作教信 美作津山に於ける四月中の日蓮主義宣傳の法数は例に依り能仁二十師數會の會合に出席、熱心に教光を宣揚されたり。  
●福井通信 石井寛俊師は妙經寺赴任以來發奮努力せられし事甚だ多し、破頭を極めたる寺院に對して今回は二千餘圓の大修繕を加へ、特別寄附として惣代人伊藤由太郎氏數百圓を以て木製金指環瑠璃指輪對其他幾多の特別の寄附あり、實に輪奐の美を極めたり、依て本年四月九日の兩日を以て宗祖日蓮大聖人の六百五十遠忌音樂天童大法會を修了せり、兩日に亘りての聽者者は千五百人にして實に盛會なり。  
九日午後設教  
異體同心 石井寛俊  
信仰の力 石井暉應  
九日午後七時遠忌記念講演  
發心 石井寛俊  
天地公道 矢野聖顯  
聖祖開教の意 石井暉應  
十日午後三時 石井寛俊  
法衣寄附

●上田師入蓮成寺 神戶の弘通所を完成したる上田智量師は、四月十八日正式に大阪蓮成寺に入寺されたり、同寺は全國重要な地たる大阪の中央に位す、師の如き信仰篤實の人に依りて大阪教蓮の益々正道に旺盛せんことを祈る。  
●日蓮信行會 同會は熱烈信行の戸各居士が單身實行して日蓮主義の布演に盡せるにて、今事務所を牛込區中里町廿七番地に設け、毎土曜、一日、十五日各午後七時より設教を爲せり、先頃「法華經法王軍組織の旨趣」なる印刷物多數を頒布して教勢を張りつゝありといふ。

●「みたから」の布施本 神戶市吉岡正太郎氏は常に各種の施事をなして先靈の追福を營まれ居られ過日は亡父の爲め「足利時代の國土」を施本し、又客月は近く新刊されたる「みたから」一百部を各方面へ布施せられたり。

### 遠州吉美通信

#### 遠州吉美妙立寺大法要并に大講演會概況

春邑給滿百花爛漫の好季、三月二十六日より三日間開祖御直遊の靈利たる妙立寺に於て大法要并に大講演會を執行せり。其概況を擧ぐれば、三日間主任講師として特聘せられたる宗務總監權大僧正野口日主師は二十六日午後三時三十分鷺津驛に着せらるゝや、妙立寺檀家總代を始め、在郷軍人分會長、各字區長、青年會長、各團

代表者等の出迎を受けられ、同寺一老の先驅にて、御着山、中門より入り紫綬の幔幕を張懸されたる今圓建築の大玄關より登昇、住職岡本圓正師の先導にて新築書院に着座、夫より出迎者一同に御挨拶、休憩後法要將に始らんとするや、堂の内外雜沓言語に絶す、堂内に音樂を奏し始るや、大師野口權大僧正已下參列の諸師の行列徐々に入り道場を臨み、堂内の莊嚴盛せる事云までもなく殊に今圓豐田佐吉氏より六百圓を投じ寄附せられたる金箔木輪廓一際衆人の目を引けり、斯くて野口權大僧正の大師師の許に懇懇鄭重なる法要了るや、直に野口中前席高橋後席の設教あり、午後七時より野口僧正を始め區内各布教師交々長廣舌を奮はる、聽衆滿堂餘興としては客殿内に近郷近在有志の生花會あり、客殿外庭には妙立寺御的と稱して大弓射あり、境内には數十軒の露店徹宵せり、二十七日は前日の通り堂内大法要修了後、引續き堂外忠魂碑前に於て、吉津村向武會主催の戦病死者追弔法要を執行し、了て直に山本布教師野口僧正の設教あり、夜に入ては前夜の通り大講演會を開催す、二十八日は御開山報恩會、續て先代日蓮上人の七周忌を嚴修し、終て山主岡本權僧正の設教、并に村内十二分區各婦人會より奉獻せる風説文挿讀あつて三日間の大法要は全く終了せり。二十六七兩夜講演々題辯士は左の如し。  
三月二十六日午後七時開始  
信仰に就て  
修養と日蓮主義 高橋暹碩師  
四恩の調節と修養 山本通辨師  
日蓮上人の主張 野口權大僧正  
佛敎之要旨 清水一乘師  
如來壽品之意義及信仰 松木聖晴師  
野口權大僧正

●大阪教信 堂開寺齊藤義應師は四月一日は中野宅に於て、信仰意識を、二十一日は相馬宅にて釋尊の成道を、二十二日は堂開寺に婦人會を催す。京藤、江見乾丈、上田布教師出席さる。  
一九



り中原布教師の派出布教あり、午前十時より繰殿なる式を擧げ、紀野師の奏上文朗讀、中原布教師は教區代表の祝詞を、世良醫師は研設會代表の祝詞を朗讀し、式後中原布教師の講話あり其より盛大なる宴會に移り日没散會、午後七時より研設會開會。

▲中原布教師は現代及將來の宗教の題下に廣長舌を振ひ、講演後會員の懇親及紀野師普山賀宴を開き、野北中佐の發聲の下に天皇陛下の萬歲三唱、并に日蓮主義紀野師の萬歲を唱へ、益々會の發展を期して散會す。

▲同三十日白銀書林に於て紀野師の家語講話あり。

●名古屋教報 統一團名古屋支部の春季大法要は、折柄登山せらるゝ野口宗務總監、鈴木法務部長、大連西伯利の開教を思ひ立ち西下する江見乾丈君、其他二三氏教區寺院住職の參列を乞ひ、四月九日正午より市内常盤寺に於て、團員一同の盛大なる法要を厳修し了つて、山本布教師、野口僧正の懇篤なる御説教あり、薄暮參聽者何れも法悅裡に踏路に著く、夜は書院に於て宴會を開きしが何れも席上演説に熱辯を振はれ志氣振興に資する所ありしは、教團發展の爲慶賀すべきことにこそ。

▲十日夜(ニコ) 健兒會靈山寺古渡校竹越先生、松ヶ枝校吉川先生、有田陽陽師のお伽噺、大口主任講師の日蓮上人御傳は、三百の菩薩兒に深き印象を興へられたり。

▲廿日夜(土曜講演妙行寺) 大口金三郎君、有田安道師出演せらる。

●千葉縣彙報 奏師報恩會 四月十九日、市原郡東村金剛地本宮寺に於て執行、演説は吉見俊教師は法華教に現れたる金剛心、西村會立師は因果の法則にて、聽者百五十餘ありたり。

●大成花見講演 四月十八日、大成區民一統の館にて湯津尋常高等小學校に開きたる花見宴會の席にて山下純秀師は櫻と日本と法華に就て講話せりと。

●片貝修養會 四月廿六日、三上義徹師を招聘

して片貝小學校に講演を開催す。菅井校長開會の辭ありき。▲廿七日は鳴濱村に催す、此村は外宗より歸信せし我宗の者廿戸、耶蘇五戸、外は悉く眞實宗にて聽衆百六十名、戸村啓藏、戸田靜一、宮崎性惠の諸氏出席、三上義徹師は人と題して講演。▲午後五時より片貝館に旭日遙拜會に就て熱心講話す、折柄同館に保養中の砲兵中尉竹内善次君の質問あり、同氏も非常に感ぜられて晩餐會を共にす、中尉句あり「日蓮の教うれしや夏の月高柳、戸田、戸村氏のは略す。

●開宗記念講演會 四月廿七日永田光昌寺に於て支學林傳道部と大綱御書讀會と聯合にて開催す、柳木山主開會の辭、成東中學石井教授は「歡喜」を、秋山教授は「佛敎とは何ぞ」を、竹内教授は「信仰復活論」を聽衆八十名。▲四月廿八日大綱公會堂にて、少年會を開く主編大綱編會、午前の部は開會の辭秋山氏、孝子大臣岩佐氏、袋の話し井井氏にて、式順後記念品を贈呈の上閉會、集るもの二百名。(因に記念品は若佐郵便局長と秋山氏との考案に依り、類品の袋と稱するものを作り、袋には聖訓を掲げ、貯金囊帳へ郵券を貼り、實生活と宗教生活との調和を計らんと試みたるものなり) ▲午後は土屋學監も加はりて感化力大なりき。▲此會に就ては大綱佛敎婦人會及鎌倉會の協力も多大にして、七里法華信仰復活の曙光とめられんとす。

●九教區教信 布教師日暮支靜師は四月十五日印旛郡旭村山梨松澤寺に於て講演開催、西郡容瑞師前席、日暮師は愛國論を辯ず。▲十七日同郡川上村眞福寺に婦人會の爲に、色心の修養を講述、海老澤乾樹師、淺井用草區長の前席あり、夜に入りて幼童を開會、聽衆三百人。▲廿八日山武郡澤村本極寺に於て少年修養會の爲に海老澤、花澤氏等の演説、富田會長の開會の辭ありて盛會なりき。(監督布教は前説に出に付略す)

●山武通信 廣部乾山師の近況左の如し。

▲三月二十一日 眞龜淨泰寺にて講演。▲四月九日、駒込東榮寺にて開山會法説教。▲二十三日、眞龜淨泰寺にて例會講演、三月分は略せり。

●丘山教信 四月十七日午後一時山武郡丘山村東成寺に常例講演を開く、日蓮聖人傳その二を高貫見龍師演説。▲尙ほ同寺にては同師住職已來例月講演を開催するは勿論春秋二期に大講演を開き來れるが、五月一日は午後一時より本年度春季大講演を開き左記の如く講演あり。夜間宗祖幻燈會を催し晝夜共講場立鐘の餘地なきほどの盛會なりし。

日蓮上人と鎌倉時代 渡邊玄雅師 高貫見龍師 徳海の一箇

●市原通信 四月八日市原郡湯津村下野本泰寺にて午後一時より春季布教講演を開催す聽衆六十餘名。開會の辭高貫見龍師。演説を高貫見龍師。徳海と宗敎を竹内布教師。

▲四月九日午後一時より同村久々津本照寺にて開會す此日五長より一般の休業を宣し、全五聖を尊し、講場立鐘の餘地なかりき。開會の辭を大和久無外。宗敎心を山下純秀。佛恩深大を高貫。健全なる信仰を竹内布教師。

▲同日午後六時より同村神崎眞淨寺にて、青年團の爲め臨時講演開催、聽衆青年有志多數來臨せり、開會の辭を大和久。國民の覺悟を山下、明々徳を高貫、大義名分論を竹内布教師。

▲同日午後六時推名村常福寺にて開催、雨天なりしも聽衆多數。徳海の一箇を高貫、死生觀を竹内布教師。

●青年團 (願本青年布教團教信) 四月廿八日此の日宗宮御建立の佳節なれば二月に於ける例會を押し日來光寺に開催す、集會者は本願顯明邊管事を初め山田、竹内、倉上、宇津木、河野、稻子、長岡の七名なりき、諸般の協議事項を決定一二の研究問題をも討議し、午後一時宗旨御建立報恩の爲め讀經を費前に捧げ直に講演に移り。開會の辭山田誠心、久遠の生命長岡育應、正と邪會上唱樂の諸師講演す。

當日は兼て山田師の略説により、信男女の參聽するもの多數、法益深きを覺す。

●教信第二報 茂原市を幸道路布教開催す、出席者は山田、長岡、竹内顯鎮の三師各自熱心に雄辯を揮ひ日蓮主義の宣揚に努む宛も節句日なる故常日よりも入出多く爲めに傾聽するもの多數なりき。

●日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 直に御聯想下され候儀に候

京都 三條通鳥丸東入ル町

草木本店 電話中七三五番 振替口座東京一五五九番

東京淺草區三好町二番地

草木支店 電話下谷三四三四番 振替口座東京二四五六八番

●本誌掲載の廣告店は皆信用あり確實なる良店舗なり御信用の上御注文あれ

**日宗法衣専門**  
青雲帽 帔 教 帔 服 袴

**飯田法衣店**  
京都市佛具屋町五條北  
振替口座大阪大座四八七

定價表は御申遊次第  
何時でも御道中上候

日本橋區坂本公園  
加賀 加能 亭

●荷も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候

**佛像佛具 調度所**

宮殿幢天蓋一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈

總本山山身延山  
大本山妙満寺  
大本山本國寺  
日宗各教團

京都寺町四條南大雲院前  
**辻井岩次郎**  
振替大阪八一五七番  
電話下三二五八番

●御用仰せ被下候は、叮嚀深切を旨と教候

**位牌木魚卸小賣**  
御來店之節ハ陳列場へ  
御來車被下度は迄トハ  
一層勉強仕り  
佛具一切陳列仕置候

各本山御用達  
**佛像佛具 一切卸小賣**

定價表郵稅四錢

小賣部 京都三條小橋東入南側  
**三法堂佛具陳列場**  
長距離電話中七七八番  
振替口座東京四〇七五九  
大阪四〇七五九

卸部 京都市三條通小橋西入  
**藤田總治**  
本舖



●本誌に掲載の廣告店は皆信用あり確實なる良店舗なり御信用の上御注文あれ





(號十八百二第)

- |                           |          |
|---------------------------|----------|
| 生と妙                       | 主任 松尾鼓城  |
| 死と樂觀、日印は同一の思想             | 侯爵 大隈重信  |
| 日蓮主義の信仰と活動                | 大僧正 本多日生 |
| 日蓮聖人教義綱要(第十回)             | 僧正 井村日成  |
| 機微譚語(五七學者の本領<br>五八十四貫の大男) | 山根青村     |
| 課題和歌「山家夏月」                | 子爵 清岡長言選 |
| 教育——宗教(K生に宛たる書翰)          | 秋山琴子     |
| 統一俳句                      | 各地雜報     |
| 世界第一多量數(一少女の答)○悉く信仰的に等    |          |

所編輯一統町前山白川石小京東 所取扱務事行發

▶番三三五三三京東座口替振◀

# 出第七卷

世界的 經典の 根本的 闡明

第一卷より第七卷迄刊行

本書は大藏經中重要なる經典約一千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し、且つ要文を翻譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義深遠なる哲學的の眞理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也大藏經は佛教各宗の源流にして復是れ東洋文明の最高權威たるは論なき所今や新文明の創建に進むに當り歴史的思想の傳統を踏觀するの必要迫れるの時この大著に接す心ある國人は舉つて本書の出現を歡迎すべき也。

- |          |               |             |                   |
|----------|---------------|-------------|-------------------|
| 本多 大僧正 著 | 三版            | 法華經講義 (全二冊) | 各壹圓八拾錢<br>小包料各十二錢 |
| 多 僧正 著   | 四版            | 日蓮主義 (全一冊)  | 九拾五錢              |
| 師 再版     | 修養と日蓮主義 (全一冊) | 九拾六錢        | 九拾五錢              |

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

文學博士 井上哲次郎先生叙  
文學博士 姊崎正治先生(附)論文 (全拾八卷) 隔月刊  
佐藤鐵太郎先生序 大僧正 本多 日生 師撰述  
▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所▲本誌定價一冊  
發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人坂尾英四郎△印刷人鈴木日雄(十錢郵稅五厘▽)

# 大藏經要義

入函金方三裝洋判菊  
頁百四約卷每  
錢拾八圓壹各價正  
錢二十各料送地内

發行所  
町本區橋本市京東  
館文博  
番〇四二京東座口金貯替振